

おわりに

宮台真司

僕は「神隠し体質」です。小学時代を京都で過ごしましたが、小4からは山科やましなにいました。国鉄の北側から見える東の山に「しろいわ」という巨大岩石が見え、一人でよく登りましたが、ある時、友達と「ここから琵琶湖びわこに行こう」と思いつき、山中で何時間も迷いました。

大人になって久米島に旅をした時、鍾乳洞に入っつていつものように立入禁止の先に進んだら、足元に白化した炭のようなものが拡がっていました。懐中電灯で照らすと骸骨が一面に堆積していました。昔からの風葬の場所でした。それで僕はトランスに陥りました。

その晩ふらついていると街灯のない真っ暗な先に光が見えました。近づくとも20m四方ほどの小さな祭場で十数人の男女が円陣でエイサーを踊り、ほぼ同数の地元の人が囲んでいました。「内地の人ですか」「はい、まずいですか」「いえ、御一緒に」。夢の時間を過ごしました。

プーケットに夏の旅をした時、何も調べなかったので雨期の真っ最中でした。地元のガイドに電話して泳げる場所に案内しろと頼んだら、地元の屈強な刺青男いれずみたちが数人乗ったモーター

ボートでラグーンに連れていかれたのですが、その時は死ぬかもしれないと思いました。

5 m 以上はある高波の間を縫って高速で進むのですが、時々高波の上に昇って数 m 落下します。肝試しなのか地元の刺青男たちは裸になって仁王立ちしています。長い時間が過ぎてラグーン（数年後にピピ島だと分かりました）に着いて、浮輪で浮かんでいたら熱中症になりました。

そんな神隠し体質＝感染体質が、僕の学問を方向づけました。すごい人に感染して教養を身につける。極左（ブント主義）の廣松渉先生と極右（天皇主義）の小室直樹先生に感染して師事。読書ではチョムスキーとルーマンに私淑、寝ても覚めても彼らの本を読んでいました。

小説家夢野久作にハマることで知った日本最初の民間右翼団体玄洋社の創設者・頭山満（久作の父杉山茂丸が一時期側近）は、こいつはスゴイ奴だと見込んだら、右か左か自由主義者か中国人かに拘わらず食客（しよっかく）にして衣食住を支援しました。孫文を匿（かくま）ったことでも知られています。

これだな、と思いました。イデオロギーに関係なくスゴイ奴はスゴイ。スゴイ奴同士がイデオロギーを越えて連帯する。廣松渉も小室直樹もチョムスキーもルーマンもスゴイとしか言えない。「この世ならぬ存在」。圧倒されましたが、圧倒されて終わりではありませんでした。

話し方から歩き方まで真似ました。そう、ミメシス＝感染的摸倣です。それゆえに猛勉強しました。「感染的摸倣」の翻訳は90年代に教育関連の文を書いていた時に思いつきました。競争動機でも理解動機でもなく感染動機。能動ではなく中動。絶対的な享樂の時空。

競争動機や理解動機は、所詮は能動で、相対時空。感染動機は、中動（委ねへの開かれ⇨受動的能動）で、絶対時空。同じ時期、一水会代表だった鈴木邦男兄の本を読んで情動の連鎖が右と左の垣根を越えるとの記述に出会い、感染しました。鈴木兄の本の解説も書きました。

塩見孝也が首謀したよど号事件（左）・に感染した「楯の会」三島由紀夫の自決（右）・に感染した反日武装戦線「狼」<sup>おおかみ</sup>のテロ（左）・に感染した「憂国道志会」野村秋介の経団連事件（右）。日本の「意気に感じる」情動連鎖の伝統を擁護するのが真右翼⇨新右翼なのだ——。

同時期に、相対的な快楽ならぬ絶対的な享楽を擁護する初期ギリシャの伝統に再会して語彙を獲得し（『サイファ 覚醒せよ！』〈筑摩書房、2000年〉に結実）、直後にやはり絶対的な享楽の抑圧が諸悪の根源だと見るジャック・ラカンの精神分析学に出会って語彙を獲得しました。

自発性ならぬ内発性。損得勘定ならぬ内から湧く力。力（圧伏）ならぬ美（感染）。美（見掛の美しさ）ならぬ美学（醜く見えるものの美）。獲得した語彙を映画批評本で頻用しています。かくて当然ながら後項から前項への逆行という意味での「社会と人の劣化」を見出します。

分かりやすいのは、ニセモノかホンモノか、ヘタレか本気か。反韓流デモのリーダーがデモで彼女を見つけた途端リタイアして一挙にデモが萎んだ<sup>しぼ</sup>笑い話。余命3年ブログに煽られて親韓と見做された弁護士らを攻撃した連中が、訴訟を起こされたら泣きを入れて平伏した笑い話。この連中の特徴は、所属団体がコロコロ変わったたり、あっさり辞めたり。ネトウヨ翼賛から

しばき隊翼賛へ。人権団体リーダーからネットウヨ団体リーダーへ。どこに本気があるのか。あ  
るのは単なる居場所です。居心地が悪くなると、居心地のいい別の居場所にコロコロと。

僕は1989年に数理社会学に区分される『権力の予期理論』で博士学位を取得後、対米従  
属を前提とした護憲左翼も改憲右翼も戦前基準から言えば売国に過ぎないとして、重武装中立  
を主張し、90年代半ばからは北一輝に近い意味での天皇主義を標榜<sup>ひょうぼう</sup>し続けています。

コロコロ系や居場所系といった言葉をゼミで使いますが、日本のイデオロギー団体の大半が  
居場所系の巣窟だというのが僕の診断です。居場所系という言葉は1979年から使っていま  
すが、きっかけは、東大駒場キャンパスで反原理共闘に加わり、「脱会」の支援をしたこと。

地方の優等生が東大合格で上京する。右も左も分らない。麻布出身者のような遊びや音楽  
の達人に出会って勉強田吾作<sup>たごさく</sup>の自尊心が傷つく。孤独と傷心を抱えていると週末の鍋パर्टイ  
ーに誘われる。やがて家族みたいな居場所になる。すると、今度勉強の合宿があると誘われる。  
鍋パर्टイーに誘ったのがカルト団体Aであればカルト団体Aに、セクト団体Bであればセ  
クト団体Bに、右翼団体Cであれば右翼団体Cに入る。居場所を定めた「後から」イデオロギ  
ーを学び、自称イデオロギーの徒に。今の安倍晋三首相を含めて、全てが似たようなもの。

本文でも書きましたが、居場所系は所詮は自意識系で、自意識系は所詮は損得マシンです。  
たまたま所属した集団内でのポジション取りにさもしくアクセクします。何かというとマウン

テイニングしたがるコントロールド系です。だからフュージョン系と違って一様に性愛が貧困です。

彼らは初期ギリシヤに耽溺した三島由紀夫がいう美学的な意味で醜い存在です。彼らは初期ギリシヤ的な意味で「社会の中」に閉ざされています。条理が通用しない「社会の外」への開かれがなく、ゆえに「デタラメな世界」が社会を貫徹するのもしらないまま、一人寂しく死ぬ。

初期ギリシヤではヘタレならぬ本気の内容を英雄と呼びます。それによるとヘタレは *filthen* の条件プログラムに従います。だから、救われるならばと戒律に従う。本気の内容は条件プログラムを拒絶し、不条理で理不尽な世界にそのまま身を置いて進みます（『サイファ』）。

だから英雄はミメーシス＝感染的模倣を生じさせます（三島由紀夫）。戒律や思想を越え、意気に感じた者たちが後に続きます（鈴木邦男）。歴史的経緯は本文に譲りますが、アートはこの初期ギリシヤを手本として「宗教からの自由」だけでなく「社会からの自由」を追求します。

送り手であれ、受け手であれ、継ぎ手であれ、今のアート界限にこうしたアートの伝統的な本義を弁えた者がどれだけいるのか。電気グルーヴ作品の販売や配信の停止措置や、あいちトリエンナーレの「炎上」のニュースを聴いて、一瞬後に抱いたのが、そうした疑問でした。

デキシードランドからビバップやモードを経てフリージャズに至る流れも、ジャズからロックンロールを経てロックからプログレに至る流れも、戦後歌謡からスター歌謡を経てアイドル歌謡に至る流れも、短期間での目まぐるしい変遷でしたが、当事者が本気だったからでしょう。

僕は中学時代からプログレのマニアで、ドラムスも叩きます。プログレは60年代にピアノやバイオリンなどクラシックを叩き込まれた白人の中流や日本の中流の文化資本（ブルデュー）のなせるワザですが、プログレの誕生から崩壊までの流れは本気の者たちの格闘でした。

売れる売れないの損得勘定を越えた、これはホンモノではないという違和感をベースにした追求。日本では音楽だけではなく、映画や漫画やアダルト映像にまでそうした追求と格闘がありました。それを記したのが『サブカルチャー神話解体』（PARCO出版、1993年）でした。

そこに記した通り、そうした本気の営みは1992年に急に減衰しました。僕はそれを「アウラの喪失」と呼びます。アウラとは神性降臨 advent of divinity に因んだベンヤミンの概念で、目の前にあるものではなく、そこに降りているものに反応することです。

92年のエポックを列挙します。第一がカラオケボックスブーム。歌詞や楽曲の世界観に耽溺する聴き方が廃れ、CMやドラマの誰もが知るタイアップソングの「歌えば拍手」の盛り上がり、つまりコミュニケーションツールに頹落し、蘊蓄系うんちくがウザがられるようになります。

第二がエロ本の「字ものから絵ものへ」。当時の投稿写真誌の編集長が92年の読者の変化を証言します。従来は写真に投稿子が付した説明で状況を想像できることが求められていたのが、長い説明はウザイからキャプションだけにして写真の面積を増やせという要求に変わります。

第三がアダルトビデオの「単体ものから企画ものへ」。それまではピンで主役を張れる女優が求められ、1本100万円のギャラでしたが、素人っぽい女子がフェチ的な欲望を満たしてくれればいい、抜けるシーンが満載なのがいい、とあって、ギャラも10分の1以下になります。第四が単独売春の「不良の営みから普通の子の援助交際へ」。僕が「朝日新聞」に紹介したのを機にブームになる1993年の、1年前から援助交際が始まりますが、売る子には物語がなくなくなり、買手は単に制服などの記号に欲情するようになります。

総じて、眼前のモノを通して想像できるコトに反応していたのが、眼前のモノそれ自体に反応する形に変わります。深さを欠く「いま・ここ」の表層だけを享受するのです。要は「目の前にあるものでなく、そこに降りているものに反応する」アウラの享受が、廃れたのです。

その後、ゼロ年代からのiPhone化、つまりスマホにダウンロードした（今はクラウドからスマホでストリームできる）アーカイブスから気分次第で好きなものを聴く動きが、作品や表現者の歴史に関わる時間感覚を奪い、「いま・ここ」の表層を享受する動きに拍車がかかりました。大学の講義では、作品に即して1992年から10年間の変化を詳述しますが、一口で言えば、表層化（文脈の消去）によって本気で聴く人が減った分、作者にも作品にも過剰さ（文脈の豊かさ）が求められなくなり、作者も作品もそれに適応して「ほどよい」ものに頹落するのです。若者の人間関係にも同じ変化が少し遅れて並行します。援交ピークの1996年以降、性愛

が過剰なものとして忌避されはじめ、性的退却に繋がります。少し遅れてオタク界限でも蘊蓄競争が過剰なものとして忌避され、オタクの交流がコミュニケーションカティブなものへと変わります。性愛界限でもオタク界限でも、行為に乗り出す営みが消えて、体験するだけの営みへと一元化します。送り手が消えて受け手だけになった(浅羽通明)。こうした変化を受けたせいでオタク界限ではワンフェスことワンダーフェスティバルもいつとき中断されます(岡田斗司夫)。

社会システム理論の研究者として言うところ、社会システムは相互連関する動的全体です。局所だけ変わることはなく、少しラグを挟んで全域が変わります。こうした1992年からの全域的变化の中に、その3年前にデビューした電気グルーヴを、置いて捉えるべきです。

僕は70年代半ばに高校生、80年をまたいだ4年間に大学生だった世代なので、プログレやフュージョンほどには電気グルーヴにはハマってはいません。でも彼らがプログレやフュージョンに遜色なく本気だったことは疑いなく、実際に日本での一ジャンルの創始者になりました。

実際「歌えば拍手・歌えば拍手」の盛り上がりでの90年代に抗って、電気グルーヴのマニア界隈にはデイーブでドープな佇まいたたずがありました。ライブを含めて高いエンターテイメント性があっただけでなく、社会の流れの外を指し示すアートだった事実にも疑いがありません。

その証拠に、電気グルーヴの音楽を聴いて人生が変わった、傷をつけられて元の人生に戻れなくなったという人がたくさんいます。90年代に入ってしばらくして電気グルーヴの音楽を音



源もしくはライブで聴いて感染した人も少なくない。永田さんやかがりさんもそう。

70年代末に郊外から始まったジェントリフィケーションの動きを受けて、90年代半ばから過剰さが忌避され、街から微熱感が失われ、援交やストリートのブームも終わります。クズ（言葉の自動機械・法の奴隷・損得マシン）が増え、言外・法外のシンクロが消えます。

今では、社会に——言葉や法や損得に——閉じ込められたクズが増殖し、感染がさらに生じにくくなっています。本文で述べたように、感染がなくなれば、真の学問動機も、真の表現動機も、真の性愛動機も失われます。だから、僕はあらゆる「感染を阻害するもの」を憎みます。だから、電気グルーヴ作品の販売・配信の停止直後にこの措置をラジオで強く批判し、永田さんやかがりさんの署名活動にも最初期から賛同を表明しました。あいちトリエンナーレの「表現の不自由展・その後」騒動にも早い段階から新聞などで意見表明してきました。

この本は三人の共著で一人分は短い。僕の担当部分も原稿用紙150枚。でも第一章で自粛がはびこる背景を摘抉した永田夏来さん、第二章で自粛の歴史を詳述したかがりはるきさんに続き、第三章ではアートを軸に、クソ社会の問題点とそれに抗うための術を明示しました。

僕は原発そのものよりも「原発をやめられない社会」をやめようと呼び掛けてきました。この本も同じ。電気グルーヴ作品の販売・配信停止の措置そのものよりも「そうした措置をやめられない社会」をやめようと呼び掛けるものです。電気グルーヴに関心がなくても構いません。

この本を最後まで読んだ皆さんなら、本書を指針に、クズ（言葉の自動機械・法の奴隷・損得マシン）になる人間や、クソになる（社会の外を消去する）社会に抗って、仲間と生き抜くことができるでしょう。もう怯<sup>おび</sup>えずに、好きなものを好きだと言えるようになるはずです。